1 近代的自我の成立と個人主義

▶ pp.189～191

『みだれ髪』より —与謝野晶子

その子二十（はたち）櫛（くし）にながるる
黒髪のおごりの春のうつくしきかな

細きわがうなじにあまる御手（みて）のべて
ささへたまへな帰る夜の神

清水（きよみづ）へ祇園（ぎをん）をよぎる
桜月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき

やは肌のあつき血汐（ちしほ）にふれも見で
さびしからずや道を説く君

なにとなく君に待たるるここちして
出でし花野の夕月夜（ゆふづくよ）かな

君死にたまふことなかれ

あゝをとうとよ君を泣く
君死にたまふことなかれ
末に生れし君なれば
親のなさけはまさりしも
親は刃（やいば）をにぎらせて
人を殺せとをしへしや
人を殺して死ねよとて
二十四までをそだてしや

堺の街のあきびとの
旧家をほこるあるじにて
親の名を継ぐ君なれば
君死にたまふことなかれ
旅順の城はほろぶとも
ほろびずとても何事か
君知るべきやあきびとの
家のおきてに無かりけり

君死にたまふことなかれ
すめらみことは戦ひに
おほみずからは出でまさね
かたみに人の血を流し
獣の道に死ねよとは
死ぬるを人のほまれとは
大みこゝろの深ければ
もとよりいかで思されむ

あゝをとうとよ戦ひに
君死にたまふことなかれ
すぎにし秋を父ぎみに
おくれたまへる母ぎみは
なげきの中にいたましく
わが子を召され家を守（も）り
安（やす）しと聞ける大御代も
母のしら髪はまさりけり

暖簾（のれん）のかげに伏して泣く
あえかにわかき新妻（にひづま）を
君わするるや思へるや
十月（とつき）も添はでわかれたる
少女ごころを思ひみよ
この世ひとりの君ならで
あゝまた誰をたのむべき
君死にたまふことなかれ

『一握の砂』より —石川啄木

東海の小島の磯（いそ）の白砂に
われ泣きぬれて
蟹（かに）とたはむる

砂山の砂に腹這（はらば）ひ
初恋の
いたみを遠くおもひ出（い）づる日

いのちなき砂のかなしさよ
さらさらと
握れば指のあひだより落つ

誰（たれ）が見ても
われをなつかしくなるごとき